

家庭教育を考える

吉村 憲二

全家研 東京本部 教育対話主事

はじめに

日本では高学歴化が進行しているというのに、年々家庭教育力が低下しつつあるのは、何とも皮肉な現象である。子育ては学歴とは関係ないという証なのかもしれない。

子育てを漢字1字で書くとしたら、あなたは何と書きますか？

「情」「愛」「律」「絆」「心」「誠」…

早乙女と秋男

日本人は農耕民族として括ることができる。今でこそ機械化が進んでいるが、梅雨の到来を待っていたかのように、集落一斉に田植えをする早乙女の姿は、まさに日本の風物詩であった。女性のもつ根気強さと繊細さが結実しているように感じるのは、私だけではないだろう。

ところで、稲穂が頭を垂れ、いよいよ収穫となれば、男の力強さが物を言うのである。

「早乙女」の対語として「秋男」があるのも頷けるし、田の下に力を書いて男と言うのも納得至極である。

米の収穫までには八十八もの手間のかかる作業があるという。「農家のご苦労を考えて、一粒たりとも無駄にしてはいけない。」と、教え込まれた時代は、遠くなるばかりである。

年間2,000万トンを超える食品が廃棄され

る(注1)日本の現状を考えると、「？」がいくつも並ぶほどの想いに引き込まれる。

知育・徳育・体育を支えるのが食育であるという声が大きくなっている昨今、家庭教育の課題としてとらえる必要もあろう。

家庭教育のキーワード

①親が変われば子どもも変わる

子育て中の親の悩みで多いのは、子どもがゲームに熱中しすぎるといものである。最近では携帯電話やPC等に加え、メディア依存と言うことが多いようだ。ある調査(注2)によると、6割近くの小中学生が注意を要するということである。

ゲームから卒業させるには、「すべてダメ」ではなく、遊びの中の一つにすぎないということを実感させる手立てを、工夫すると良い。

スーパーマーケットなどで、商品に手いらずしている我が子を視野に入れながらも、平然と携帯でおしゃべりに興じている親を見かける。そんな家庭では、楽しいはずの一家団欒の中でも、人ではなく携帯やテレビが、主役の座にいるだろうことは、想像に難くない。親が変わらなければ子どもも変わらない好例である。

②子どもが変われば親も変わる

初級少年院での逸話を紹介しよう。

面会に来た母親が、散歩を許可された我が子と、りんご畑に差しかった。「おいしそうなりんごだね。取って食べようか。」と息子に話しかけたところ、「母さんダメだよ。作っている人のことを考えろよ。」と、たしなめられたというのである。

「いずれ少年を家庭に戻さねばならないが、受け入れる親も変わらないといけない。」と、

少年院では親に対する教育も怠らない。親子宿泊日や親子レクを設定することで、親を変えようとする試みが実践されている。

③よい習慣が才能を引き出す

早寝早起き朝ごはん、ハンカチティッシュにご挨拶……。生活リズムをきちんと保つことの大切さは、論を待たない。

しかしながら、朝ごはんをきちんと食べさせてこそ早起きは効果が増すことを、忘れてはならない。ある学校で朝食調べをしたら、「菓子パン1個と牛乳」「バナナとスポーツドリンク」などはまだ良い方で、朝食抜きも珍しくなかったとのことである。

母親の手料理には愛情が入っているから、おふくろの味はひと味違うのである。おふくろではなく、「おやじの味」でももちろんOKである。

生活リズムが整ってこそ、学習リズムも身に付く。良い習慣が才能を引き出すということ意識することが、家庭教育の確立に欠かせないのである。

家庭教育の眼目

「出来ちゃった婚」が珍しくない世の中にあって、心に響く言葉を綴った母親がいる。

「子どもの寝顔を見ていると、しみじみ幸せを感じる。出来ちゃった婚ではなく、この子が宿ってくれたから結婚できた。『出来たから婚』なんだ。私は、この子に感謝している。」

プラス思考の彼女の言葉には、深い情愛が満ちている。家庭教育は、親から子への一方通行ではない。子どもを教え育みながら、親も共に成長していくのが家庭教育なのだ。

さて、「不易流行」という言葉がある。文芸評論家・保田與重郎は、著作の中で、教育の

不易の部分を考えさせる、内村鑑三氏の文を引用している。(注3)

・この世界の秩序は、利己主義の上になりたないこと、力は正義ではないこと、盗みはどんな場合にもよくないといふこと、生命と財産は結局われわれの最終目的となるものでないといふこと、かうした考え方は明治文明開化以後も、家庭教育の眼目とされてきた。

おわりに

未曾有の大震災に見舞われ、家屋だけでなく生活基盤や精神的な土台にも損傷を受けた日本である。

次代を担う子どもたちを育てるためにも、「家庭教育の確立」に、思いを強く寄せ合う必要がある。私たちは子育てを放棄することはできないのだから。



大津波で叔父を亡くした旧知の友人と訪れた宮城県石巻市立大川小学校 2011. 10. 16

<参考文献等>

注1：小泉武夫氏講演会 (2010. 1. 18 毎日jp)

注2：NPO法人「子どもメディア」(2010. 4. 23 読売新聞)

注3：保田與重郎文庫 No.32『述史新論』(2003. 1. 8 新学社発行)